

統計 雑感

例年のことながら、この月は月余にわたり県議会が開催される。その都度、年をおつて統計需要の多岐にわたることを痛感するのであるが、このように統計資料が地域行政の材料になり、あるいは活用されるということは私たちにとつても大きな喜びといえるのである。

気候がゆるんだというものの、今年は3月に入つてもなお寒さも厳しい。しかし大地は自然に呼吸し、草木はいやが上にも生い繁り、万物すべて躍動が始まつている。こういった季節からこの月が弥生（やよい）と呼ばれているのである。

この環境のなかで、45年についての話し合いの機会が幾たびか持たれるのであるが、そうしたおり、いつも感ずるのは話すことのむづかしさである。統計という仕事は説明会や講習会等で他課にくらべ人前で話しをする機会が意外に多いのである。誰もがそうであるように、始めのころは相手が聞こうが聞まいが自分の持時間だけ喋りまくるといつた調子であるから、相手にとつては大変迷惑なことであろう。それが馴れるにしたがい、思うことが一応発言できるようになる。しかし私自身最近になり、やつと自分で話していることが、相手に理解されているのかどうか、やたらに気になるのである。相手の反応を観察して、それに対応した話題をもつことのむづかしさに、思いをしらされることが度々である。やはり、話しというものは話術の功拙より心で話すことなのである。

統計というものの過程が上述と全く同じであるような気がするのである。つまり、一つの社会集団なり階層等を数量的に表現するという統計作成の手法にしても、最初は統計表の枠内に数値を埋めるのが精一杯であり、やがて目的にかなつた表章形式が選択できるようになるのである。しかし社会の要請はこれで事足りるとはいえなくなつている。社会経済の変容に対処して統計数字をさらに詳しく精功に分解し、観察し、動向を察知しなければならない。こうした手順の過程のなかに、人力に代わり電算機が登場したことは周知のとおりであり、統計そのものの比重が従来の統計作成という技能的なものから、その数値から集団の態様を読みとろうとする思考活動へ移行しているのである。

このように統計の前途も作る統計から思考活動へと転進しなければその価値も半減するであろうし、そうすることが、統計利用の多角化および高度化のための前提となるのではあるまいか。

そのためにも各面の広汎な資料を蓄積し、目的意識にかなつた情報を検索する時代に備えるべきであろうし、いわゆる情報化時代における統計の有する意義も大きいのである。

こうして統計の利用が促進され、従来にもまして大量な統計情報が得られるようになるのは、時間の問題であろう。その目的にそつて着々と統計調査の体系整備も行なわれているのである。

このように、統計と電算機は密接な関係をもつようになるが、ある調査によると、コンピューター・システムに吸収されて全く無くなる部分が50%、現在とかなり違つた方法で処理されるであろう部分が25%、残りの25%が現在とほぼ変わらない部分であるということが明らかにされている。すなはち、ほとんどの分野ですべての人が多かれ少なかれ、コンピューター・システムと深い関係を持つわけであり、統計についてみるとなおさらのことであろう。

(県統計課 横須賀弘)